

ランチョンセミナー8 (要望演題)

本音で語ろう、戦傷外科

General Surgeon-Hospital Director 外科医¹⁾、麻酔科医²⁾

Dr. Rawand Musheer Haweizy1), Dr. Dlear George2)

戦傷外科はすべての外科の基本である。

それは感染との戦いであり、外傷の程度が大きくなるほど、感染への対応は難しくなる。また、医療資材が乏しい環境で創傷治癒を促進させようとするとき、初期の創処置からその後の創部の取り扱い方法、そして特に栄養に関して、何が問題の本質かを教えてくれる領域である。

野生動物がけがをしたとき、動物は自分の体内にある自然治癒力に頼るしかない。文明の発達したわれわれ人類の体内でも同じ現象が起こっているはずで、いかに現代医療が進歩しようとも、その現象を無視した医療は創傷治癒を遅らせるだけである。逆説的であるが、医療資材が乏しい環境ほど、そして戦傷負傷のように重症な創ほど患者の自然治癒力に頼る治療が必要不可欠となる。

麻酔においても十分なモニターも検査データもないなか、最も重症な患者を麻酔しなければならない。かつ周術期、特に術後の創傷治癒に配慮した麻酔を行わなければならない。

ここでは以上の点を踏まえ、具体的症例とわれわれの経験を提示しながら、会場みなさんと本音で討論をしたいと考えている。